

初志の会が大事にしてきた基礎・基本

—他とどこがちがうの—

島本 恭介

一、はじめに

最近、学力の低下が教育界を初め、マスコミで盛んに取りざたされている。それに呼応して、基礎・基本の定着と言うことがにわかにクローズアップされ始めた。しかし、マスコミなどで騒がれているのは、いわゆる、読み書きソロバンの、記憶力や技能に関する知識、技能のことを指している気がしてならない。

学習指導要領において「基礎・基本」の徹底についての記述が登場してきたのは確か平成元年の改訂のときである。今回の改訂でも、基礎・基本の徹底ははっきり謳われている。

「学校の教育活動を進めるに当っては、各学校において児童に生きる力をはぐくむことを目指し、創意工夫し、特色ある教育活動を展開する中で、自ら学び自ら考える力の育成を図ると共に、基礎的・基本的な内容の確実な定着を図り、個性を生かす教育の充実に努めなければならない」（第一章総則 平成一〇年一二月）

ここで示されている基礎・基本とは指導要領に記述されている内容そのものにとらえることができる。いわゆる知識・技能だけでなく学び方の力が含まれている。

しかし、初志の会で言う基礎・基本とはもっと幅が広く、奥行きが広い「生き方の基礎・基本」を目指してきたと思う。

二、「基礎・基本」のとりえ方

私は、「基礎・基本」とは子どもの自己実現に必要なもの、つまり、主体的、創造的に生きていくために必要な資質や能力のことを「基礎・基本」ととらえている。だから、「学び方の基礎・基本」、「知識・技能の基礎・基本」だけでなく、「生き方の基礎・基本」が重要であると考え。このことは、私が初志の会に参加して初志の会のすぐれた実践から学んだことである。

私が長年言い続けていることは、基礎・基本は一律のものだけでなく、子どもによって違いがあるのは当然であるということである。何故なら、基礎・基本がその子の自己実現にとって必要なものといえるなら、自己実現は一人ひとりによって違いがあるからである。

もちろん、これら三つの基礎・基本はおたがいに有機的に結びあっている。「生き方の基礎・基本」には「学び方の基礎・基本」や「知識・技能の基礎・基本」が内包されているし、「知識・技能の基礎・基本」は「学び方の基礎・基本」に支えられている。また、知識・

技能が身に付くことによって興味・関心が広がるなど学び方と深く関わっている。

これらのことを私の実践を元に述べてみたい。

五年で伝統工業の学習をしている時のことである。M男は和紙を見て「和紙ってどうやって作るのだろう」とつぶやいた。普段この子はあまり自分から情報を収集したり活用したりしないし、問題解決に積極的ではない。だから、私は、「すごい。いい問題を持ったね」と褒め、「その問題を調べてごらん。そして、その結果をみんなに発表してほしいな」とすすめてみた。M男はさっそく学校の図書室に調べに行った。図書室の産業の本が並んでいるところで「和紙の里」という本を見つけ、その本で和紙の原料、和紙の作り方を調べた。それだけでなく、和紙は洋紙に比べ強いことや、長持ちすることなどを知った。そして、それを模造紙にまとめ、みんなの前で発表した。

このM男の一連の動きを「基礎・基本」という観点から考えて見る。

まず、「生き方の基礎・基本」である。「課題や、問題解決のために情報の収集・選択・伝達をしようとする」ことに取り組んだ。また、「自分の興味ある問題解決に向かって進んで関わろうとする」ことにも取り組んだ。これは私がM男に付けたい生き方の基礎・基本である。

子どもは成長の時期によって、自己実現をするにあたってその子の課題があると思う。ここではその子の成長課題と呼ぶことにする。教師は「今、この子にとって必要なことは何か（成長課題は何か）を正しく把握し、その課題解決に向かってその子が努力していくことを支援していかなければならない。ただ、気をつけなければならないことは「何歳だから、こういう成長過程を踏まなければならない」という枠をかけてみてはならないということである。

次に、M男の「学び方の基礎・基本」である。M男はみずからが興味・関心を持ち、追究し、表現するという学び方の基礎・基本を身に付けていっていたのである。

そして、「知識・技能の基礎・基本」であるが、M男は学び方を駆使しながら、和紙の作り方や、和紙はすばらしい良さがあるという知識をみずから獲得していったし、「資料活用ができるようになる」という技能も身に付けていったのである。もちろん、この子は、今までに身に付けた学び方を活用したと思うし、図書室には本がどのように配列してあるかの知識も活用したと思える。そして、ここで学んだことが元になって「和紙はどのように活用されているのだろうか」という新たな問題に気付き取り組んでいった。

このように、それぞれの「基礎・基本」は独立してあるものではなく、相互に密接な関連を持ちスパイラルに働きあっていると考えられる。

三、「生き方の基礎・基本」

かけがえのない自分らしさを肯定し、生きる意味を見出し、生きていることの充実感を持って成長していく子どもの健全な成長過程を重視し、それぞれの成長過程で特徴的に表

われる具体的な姿をその子の成長課程である。その成長課程はたくさんあると思うが、ここでは社会科に関する主なものをあげる。

- 問題解決の能力 ○情報活用能力 ○自分らしさの発揮
- 人とのコミュニケーション能力 ○思いやり、やさしさ
- 豊かな人権感覚 ○規範意識 ○身近な社会とのかかわり
- 国際社会への関わり

初志の会の実践を分析すると、教師は、常に、この成長課題に照らして子ども一人ひとりの実態を把握し、その子に応じた支援をして来たような気がする。

生き方の基礎・基本を考えると大切なことは、一人ひとりの違いを認め、柔軟かつ弾力的にとらえそれぞれの子どもの成長を見守り支援していくことである。また、これらは教科・領域を越えた全教育活動で付けていかなければならないし、当然、家庭・地域でも培われていくべきものである。

四、「学び方の基礎・基本」

初志の会においては、子どもが、みずからの思いや願いをみずからの手によって実現していく過程を重視してきた。そのために、子どもの自己実現に生きて働く思考力、判断力、表現力などの資質や能力を高めていくことを重視してきた。すなわち、「学び方の基礎・基本」を充実させてきたのである。学んだ結果も大切であるが、学ぶ過程をそれ以上に大切にしてきた。何故なら、学び方を学ぶことにより、新しい問題に直面したとき、既存の知識・技術を駆使し、問題解決をしていくことが可能になってくるのである。

五、「知識・技能の基礎・基本」

初志の会批判の中で多いのは初志の会では「知識・技能の基礎・基本」を軽視しているのではないかという意見があることを開いたことがある。決してそんなことはない。知識・技能のとらえ方が違うのである。

人がものを考えたり、行動するときの基準になるのは、今までの経験であろう。その経験の中核になっているのが、一人ひとりがそれまでに得た知識や技能である。新たな問題に直面したときに、今までの経験に基づき、思考し判断し行動するのである。だから、「知識・技能の基礎・基本」は人間形成にかかわる重要なものなのであり、子どもたちの自己実現になくてはならないものである。初志の会で言う知識とは断片的・皮相なものでなく粘着力のあるものといえよう。

学校教育のゆとりを奪っていたのは、学校であまりにも多くの断片的で、皮相な知識を詰め込もうとしたのではないか。私たちは子どもたちにとって必要な知識・技能は何かを次の観点から厳しく吟味してきた。

- ①その知識・技能は子どもの自己実現のうえで本当に必要なものか。
- ②その知識・技能を子どもたちみずからが獲得することが可能なものか。

六、おわりに

基礎・基本を考えるときに、初志の会で大事に考えてきたことは、基礎・基本とはみんな一律のもの、みんなに共通のものでなく、あくまでも個に応じた基礎・基本ととらえていくことである。初志の会が長年にわたり授業記録を元に子どもをみとることをしつこくやってきたのは、子どもたちにその子に応じた基礎・基本が定着しているかを見とってきたのだと思う。いたずらに、マスコミや一部の学者に踊らされることなく、今までのように子ども一人ひとりと向かい合いたい。それが、初志の会の命だと思う。

(神奈川県・横浜市立本牧小学校)

(社会科の初志をつらぬく会編『考える子ども』N.273、2002年5月号所収、pp.12-15)